

茨城キリスト教大学児童教育学科における 『労作体験』の変遷

ー現在の実践と今後の展望ー

穂積 訓*・西川 綾子**

要旨

労作体験は、約40年前に児童教育学科設置と同時に開講した児童教育学科の基幹科目である。授業では、主に植物栽培を中心とした園芸活動を実践し、生態学的な自然観および教員養成に関わる教科的な知識・技能の修得、および人間性の涵養を行っている。こうした授業目的は一貫して変わらないが、授業における体験の内容や教職科目的な位置づけは、学科カリキュラムや時代の要請にとともに変遷している。本稿では、労作体験をいくつかの期間に区分し、それぞれの期間の特徴を学科カリキュラムの変遷とともに概観する。最後に現在の労作体験の実践と第Ⅰ～Ⅲ期の活動との共通点や違いを比較・評価して、今後の労作体験のあり方について考察する。

1. はじめに

茨城キリスト教大学児童教育学科は1982年（昭和57年）に設置されて以降、教員養成における実践的な学びを特色の1つとして掲げ、多くの教員を養成・輩出してきた。この特色は現在でも受け継がれており、2024年度の児童教育学科のカリキュラムポリシーには、教育学、心理学およびその学術的関連科目群や、音楽・美術・体育・労作体験などの実技科目群を知識習得の基礎分野として設定し、授業を編成していることが示されている^{注1}。また茨城キリスト教大学（以下、本学）の教員養成の目標とその計画の中で、「強い情熱」をもった教師の育成として、「キリスト教の精神と文化」「キリスト教教育論」「労作体験」等、建学の精神であり学位授与方針にも謳われた「隣人愛」に基づく共生の精神を教職課程における学びの根底に据えている^{注2}。

これら目標の共通点として授業「労作体験」の実践が挙げられる。授業では、植物栽培を中心とした園芸活動を通して、生態学的な自然観および教員養成に関わる教科的な知識・

注1 茨城キリスト教大学児童教育学科カリキュラムポリシー、
<https://www.icc.ac.jp/about/policy/curriculum/index.html>（2024年9月30日）

注2 茨城キリスト教大学「教員養成の目標とその計画」、
https://www.icc.ac.jp/about/disclosure/No.12/teaching_course.html（2024年9月30日）

* 茨城キリスト教大学 文学部児童教育学科准教授

** 水戸市植物公園園長

技能の修得，協働等を通した人間性の涵養を目的としており，本学の児童教育学科の使命である教員養成および全人教育に関する学びに深く関わる過程の1つであるといえる．実際に，労作体験は開講当初からこれまで学科の必修科目であり，2024年度現在では児童教育学科の基幹科目に位置づけられている．1982年からおよそ40年もの間，児童教育学科では幼児・児童を取り巻く環境や学習指導要領の改訂，教職課程コアカリキュラムへの対応など，機に応じてカリキュラム編成を行ってきた．労作体験においても，授業の構成や内容は時代によって大きく変化している．しかしながら，これまで労作体験の活動内容およびカリキュラムの位置づけの変遷や評価について，教職課程を含む学科カリキュラムの観点からの包括的な振り返りは行われていない．

2024年に本学の児童教育専攻と幼児保育専攻が児童教育学科として統合された．学科は新しいステージに突入するとともに，労作体験の授業内容も大きく変更している．本稿では，労作体験がこれまでどのような変遷を遂げてきたのかについて，学科のカリキュラム編成や教職課程等と合わせて記述することを目的とする．その際，いくつかの先行研究から労作体験をいくつかの期間に区分し，履修要覧^{注3}をもとに各期間の活動内容や履修年次・単位数などの科目情報，教職科目としての位置づけなどを変遷の時系列に沿って記述する．最後に，現在の授業実践を概観・評価して過去の実践と比較して，今後の労作体験の展望を考察する．

2. 児童教育学科設置から約20年間の労作体験の変遷

表1は，開講から現在までの労作体験の科目名称と科目情報の変遷を示す．なお本稿では，特に断りが無い限り，表1に示す科目群をまとめて“労作体験”と記す．先行研究では(岩崎ら，2006；立木ら，2006)，労作体験の実践内容から1982年度入学生から2001年度入学生までを大きく3つの期間に区分している：第Ⅰ期 1982～1986年度生，第Ⅱ期 1987～1993年度生，第Ⅲ期 1994～2001年度生．本稿では，まず第Ⅰ期から第Ⅲ期までのカリキュラムと授業概要について振り返った後，2002年度入学生から現在までの期間の授業実践について言及する．

表1 授業「労作体験」の科目名と科目情報の変遷.

	科目名	単位	配置年次	学科目	教職教科
1982	労作体験教育論	2	2	児童学	－
	自然観察と労作 (1) 生物と環境	2	3	児童学	理科
	自然観察と労作 (2) 労作実習	2	2～3	児童学	理科
1990	労作体験教育論	2	2	児童学	－
	労作実習	2	2	児童学	理科
1993	労作体験教育	4	2	基幹科目	理科→生活科*
2015	労作体験	2	2	基幹科目	生活科
2017	労作体験Ⅰ，労作体験Ⅱ	1	2	基幹科目	生活科
2019	労作体験Ⅰ，労作体験Ⅱ	1	3	基幹科目	生活科

*2000年度に理科から生活科に変更された.

注3 『履修要覧』,1982(昭和58)年度～2024年度(令和6年度)，茨城キリスト教大学発行

2.1 第Ⅰ期のカリキュラムと授業概要

児童教育学科における1982年設置当時の学科目は「教育学」「児童心理学」「児童学」であり、当時の労作体験である「労作体験教育論」（2単位）、「自然科学と労作（1）生物と環境（以下、生物と環境）」（2単位）、「自然科学と労作（2）労作実習（以下、労作実習）」（前後期各1単位、計2単位）は全て児童学の科目に位置づけられていた。労作体験教育論と労作実習は2年次必修科目で、生物と環境は3年次選択科目であった。なお、生物と環境および労作実習は、「小学校課程理科」とあわせて、教職科目における教科に関する専門科目の「理科」に設定されている。これは、当時はまだ小学校学習指導要領に生活科がなかったこと、また学修内容が次に述べるように植物栽培と生態学を中心とした自然科学的視点で設定されていることによるものと思われる。

労作体験教育論は、1983年度の授業概要（担当者：石原秀志先生）の引用によれば、「人間の形成、ことに幼少年期の成長と発達にとって、2つの体験、すなわち労作体験と環境体験とが重視されねばならない。ここでは、前者について、多少の理論的構成を試み、さらに、このことを教育の中核に据えながら構想し、実践した先覚者たちの歩みから学ぶとともに、今の時代に可能かつ必要な教育としての『労作体験』の具体的なあり方について考察してみたい。」とあるように、労作体験における教員養成・人間性の涵養の理論を支える講義であったといえる。労作実習では、「3年次生によって苦心開墾された花壇を引き継いで、より充実した植栽形態を実現し、またうら山の圃場を利用した秋冬型作物の基本的諸作業と耕土維持管理に関する実際的学習を体験する。」「2年次の実習で開設した小花壇の夏秋型植栽への転換、児童教育学科うら山に設定した小圃場の完成と夏作物の作付けから収穫までの諸作業を体験すると共に、植物の育成についての基本的プロセスについて学習する。」とあるように、一年を通した植物栽培を学内の大学2号館裏の斜面を開墾する形で実践が始まった。一方、生物と環境は、概要に「生態学の立場から、主として個体および集団レベルの生物現象を取り扱う。自然条件下における植物の生活、生物群集および生態系の成り立ちを解説し、生物と外界の間の物質およびエネルギー経済について述べる。人の生活と環境の関わりについても述べたい。」とあるように、主に生態学的な観点から自然を捉え、かつ現在の生活科と関連する授業内容となっている。

1982年カリキュラムでは、上述のように労作体験教育論と労作実習は2年次開講の必修科目となっており、理論と体験を組み合わせた形で展開されている。また生物と環境は3年次開講の選択科目で、2年次で修得した自然に関する知見・体験を理論で補強する学修過程となっている。この期間、これらの科目は試行錯誤しながら活動の場を広げていたようだ。1982年度の労作実習の概要には「学外実習地の利用が可能になった暁には、植林地造成を含む実習場造成のための諸作業にあたるものとする。」との記述があり、その後の1984年度の概要には十王自然学習センターでの実習計画について詳しく記述されている。また1985年度の生物と環境の概要には、「（省略）本稿では自然条件下における植物、動物、微生物の生活、生物群集と生態系のなりたちを述べたい。また講義のみでなく、十王自然学習センターを利用して野外での自然観察と関連付けて学習をおこなう予定もある。」と記述されているなど、自然と関わる場が学内から学外にも徐々に広がっていった様子が示されている。第Ⅰ期はその後に続く労作体験の活動の基礎をつくる、まさに黎明期であっ

たといえるであろう。

2.2 第Ⅱ期のカリキュラムと授業概要

1990年度のカリキュラム編成において、学科目「児童学」内の「自然科学と労作」の小区分が廃止された。このとき生物と環境は廃止され、「自然科学研究」（4単位）が新たに設けられた。またそれまでの「自然科学と労作（2）労作実習」は「労作実習」（2単位）となった。

第Ⅱ期の労作体験の大きな変更は、労作体験教育論（2単位）および労作実習（2単位）の授業担当者が岩崎哲郎先生となり、これらの科目が他学科の2～4年次生も履修できるようになったことである。履修要覧における授業内容についても、生物と自然環境の相互作用や自然と人の生活との関係、学校教育における労作体験のあり方について具体的に記述されるようになった。この変化は、1990年度の学習指導要領の改訂にともない新設された生活科への対応を念頭に置いたものである。なお生活科が施行された1992年カリキュラムには「小学校生活科研究」が3年次科目として開講されるようになった。

1990年のカリキュラムにおいても、労作体験教育論と労作実習は引き続き2年次の必修科目である。労作体験教育論の概要には「（省略）そのような労働の厳しさと喜びとを経験しながら、『ヒト』という生きものは『人間』になっていく。（省略）児童教育における労作体験の意義や効果を、実践例に基づいて検討し、更に具体的な教材開発の方向を探ろうとする」とある。また労作実習の概要では「大自然を『探検』するのに必要な知識や手立てを獲得するには、（省略）、自分自身の体や五感を駆使して直接体験することが重要である。（省略）①手軽にできて失敗しない教材づくり（学校園における花壇づくり）、②労働の厳しさと喜び（本学・自然学習センターの開墾、森林管理）、③枝の美しさと素朴さ（学外実習）、④ふるさとの自然と人びとのくらし（課題研究）（省略）」とあるように、教員養成における生活科分野の基礎的な知識・技能の修得、および人間性涵養に関する具体的実践の記述が多く見られる。

第Ⅱ期は、第Ⅰ期の内容に加えて収穫物の多様な活用や調理が追加され、学生たちの興味・関心もより高まった時期である（立木ら、2006）。上記の概要の②に自然学習センターの開墾、森林管理および③枝の美しさと素朴さ、とあるように、園芸活動だけではなくNPOと連携した植樹や下草刈りなど労働の厳しさと喜び、作品作りによる達成感などを感じられるような林業的活動やものづくり活動も実践されるなど、労作体験の授業内容が大きく発展した。しかしながら、こうした多様な体験活動は、1991年の大学設置基準の大綱化にともない、限られた時間の中で実施可能な内容に移行していったという（岩崎ら、2006）。

2.3 第Ⅲ期のカリキュラムと授業概要

1993年度には再びカリキュラム編成があり、学科目が「基幹科目」「専門科目」「資格科目」と現在の学科目と同じ形になった。このときの改変で労作体験教育論および労作実習は廃止され、新たにそれらを統合した「労作体験教育」（4単位）が2年次の必修科目として基幹科目に設置された。その後、労作体験教育は24年間（1994年度生から2018年度生）、

岩崎哲郎先生の担当のもと開講されている。授業概要には「(省略) 通年・週1コマの時間では、十数回ずつの講義と実習とを、そして、土曜日や長期休業中などの延十数コマ分の時間には、自然学習センターでの実習などを行う。また、学外での多様な実習や課題研究にも取り組んでもらう。」とあるように、理論と実践の学びの往還を1つの科目内で行うようになった。なお、これまで教職科目における教科に関する専門科目は依然として理科に設定されていたが、2000年に「生活科」に変更され現在に至る。また、労作体験教育でも児童教育学科以外の学生の受け入れは継続された。

第Ⅲ期の活動には、生活科の要素がさらに盛り込まれるようになった。2000年度の労作体験教育の概要には、次のように記されている。

〈この授業のねらい〉

種々の労作体験を通して、自然との関わりや地域の人びとの生活を考えるとともに、生活上必要な習慣や技能を修得する。さらに、児童教育における労作体験の意義や効果を検討し、「生活科」の教科目標を具体例に基づいて理解する。

〈授業の概要〉

(省略)

○講義(週2時間, 15週) A. 風土の食物, B. 環境と保全, C. 自然と人間, D. 地域の暮らし, E. 労作体験教育の意義

○実習1(学内, 週2時間, 15週) A. 野菜の栽培と加工・調理(大豆の種まきから豆腐まで, ソバの種まきからソバきりまで, 小麦の種まきからパンまで, など), B. 草花の栽培と利用(ハーブ・ガーデン作りから草木染めまで, イチゴの種, 花, 実)

○実習2(学外, 計30時間) C. 森林管理と木工作(自然学習センターでの自然探し, 植樹, 下草刈り, 枝打ち作業, 木工作, など), D. 地域の生産活動体験(地域との連携)(田植え, 稲刈り, 餅つき, 芋掘り, 干芋作り, など), E. 地域活動への参加(児童館の自然遊び補助, 少年自然の家の手作り教室補助, 植物公園の子ども向け企画補助等, など)

第Ⅲ期には、これまでの活動に加えて、実習2の中に地域の生産活動や子どもたちと関わる活動など、生活科における指導者の実践に関連する学外活動が加わっている。このような活動の実践を可能にした要因は、通年4単位科目の時間設定(講義, 演習の時間が週2時間ずつ, 学外学修が30時間)における効率的な活動計画の立案, 労作体験実践に携わった当時の教職員および関係者の方々の理解と協力, そして履修学生の活動に取り組む学生たちや授業担当者の熱意であろう。学生たちは、ときに労作体験に関わる知識を学び、ときに学内園場で作業をし、収穫物を調理し、グループワークを通して多様な活動に取り組み、ときに学外で子どもたちや地域の諸施設と関わるなど、総合的な体験を通して自然や人間生活, 生活科的な活動について学んでいる様子が見えてくる。

岩崎ら(2006)によれば、これら3つの期間における、学科卒業生の授業に対する「好意」

は第Ⅱ期が最も高く、次いで第Ⅲ期、第Ⅰ期の順であった。著者らは、第Ⅱ期における種まきから加工・調理まで一連の活動の導入が、好意が高まった要因であると考察している。第Ⅲ期が第Ⅱ期より好意が低かった理由として、そば切り等の活動を行わなかったことを挙げている。一方、「大変さ」は、各期間で中程度だが、相対的には学内・自然学習センターの開墾と力仕事が多かった第Ⅰ期でより高い傾向が見られた。また立木ら（2006）は、どの期間の卒業生も現在の気持ちとして、労作体験の活動を興味深く、めんどろではなくかつ難しくはないと思っていること、生活や仕事、子どもの教育の上で役に立ったことについての自由回答が多く見られたことを示した。すなわち、学生は労作体験の授業において、多面的に興味・関心のある活動の導入、適度な難易度の労働や作業、教職や生活における具体的な活用の体験を期待していることが考えられる。

3. 2002年度以降の労作体験の変遷

児童教育学科では、幼児保育専攻の設置以前の2002年度から幼稚園教諭一種免許状の取得が可能となった。労作体験の概要には以前から「自分自身の体や五感を駆使して直接体験」との文言があるように、領域「環境」のような視点の記載があることから、幼一小の接続を念頭に授業を展開していた様子がうかがえる。その後、児童教育学科は2004年度に児童教育専攻（以下、Pe）と幼児保育専攻（以下、Pc）の2専攻制となり、Pcで幼稚園教諭一種免許状および保育士資格が取得可能となったが、Pcには労作体験教育の授業はしばらく設けられなかった。すなわち次のカリキュラム編成直前の2014年度までは、Pe学生を中心に第Ⅲ期の労作体験が実践されていたといえる。その後、2015年度に両専攻に「基幹科目」として「労作体験」（2単位）が通年・2年次必修科目として設置され、それにともない他学科学生への開放は終了した。2017年度には学内で通年科目が廃され、「労作体験Ⅰ・労作体験Ⅱ」（各1単位）、2年次必修科目に変更された。教職コアカリキュラムに対応した2019年度カリキュラムへの改変では3年次必修科目に変更された。2024年度には、両専攻は統合して児童教育学科となり、労作体験Ⅰ・Ⅱも学科内で同じ教育内容に統合している。

この間、2016年に十王自然学習センターは取り壊しとなり、また授業の単位数も4単位から2単位に半減して、労作体験の主な活動の場はキャンパス内に戻った。なお、2016年度から2018年度までは岩崎哲郎先生と穂積 訓（著者）が、PeとPcの授業をそれぞれ担当した。2019年度から2020年度の2年間は穂積が両専攻の授業を担当した。その後、2021年度以降は穂積と西川綾子（著者）の2名が両専攻の授業をオムニバス形式で担当している。以上のように、2015年度入学生から現在（2024年度入学生）までの期間は、短期間にもかかわらず、児童教育学科および労作体験の授業環境が複雑に変遷している。ここではPc設置以降の期間を便宜上第Ⅳ期と呼ぶことにし、授業体制が大きく変わったこの10年間の様子を詳しく説明したい。

3.1 第Ⅳ期前半の労作体験の実践

以下に労作体験の植物栽培の実践例として、PeとPcそれぞれの労作体験Ⅰ（2018年度前期）のシラバスを示す（図1）。

2018年度のPe・Pcのシラバスを比較すると、Peでは生活科における内容が、Pcでは領域「環境」における内容が、それぞれ実施されていることがわかる。Peのシラバスには、生活科における自然と人間との関わりや地域の人々の生活を考えるとともに、生活上必要な習慣や技能を身につけることに注力されており、そのために季節と関連した畑やその周囲での活動や収穫物の活用が多く取り入れられていることが示されている。一方、Pcのシラバスには、季節の栽培や植物の観察や活用だけではなく、畑周辺での動物の観察も含まれている。領域「環境」においては広く生物に親しむこと、また幼児のダンゴムシや昆虫類への関心が高いことを念頭に置いたものである。なお畑では幼児・児童を対象とした食育の観点から有機無農薬栽培を取り入れており、その結果として栽培植物の周囲に多様な動物が見られることから、それらを包括的な教材として活用している。

両シラバスに共通しているのは、生物と季節との関わり、植物の成長、収穫と活用など人間生活との深い関わり、および理科など自然科学的な視点の獲得である（穂積，2017）。例えば、小学校理科につながる授業回として、Peの授業では、03. 春に咲く花さがし、06. 夏に咲く花さがし、11. 植物の花とタネ、12. 植物の葉、茎、根、13-14. 野外観察（学外集中実習）があげられる。一方、Pcの授業では、2 季節と植物（春）、3 植物のからだのつくり、6 植物の生活環、7 植物の生長観察、8 植物の分類、9 植物標本の作製（春）がそれに該当するであろう。

<p>Peのシラバス（担当者：岩崎哲郎先生）</p> <p>授業概要 植物の栽培について、基本となる作業を体験する。 大自然を「探険」するのに必要な知識や手だてを獲得するには、文字や映像などを通して間接的に経験するだけではなく、自分自身の体や五感を駆使して直接体験することが重要である。「タネまきから、食べ、出し、後始末するまで」「原料づくりから、製品を使い、処理するまで」など、一貫したプロセスを実際に体験することを通して、「生活科」の教科目標を理解し、実現する知識と技能の獲得をめざす。 「晴耕雨読」臨機応変、天候や植物の成長にあわせて授業内容を組み立てていく。</p> <p>授業計画 01. はじめに 02. 種まきと植えつけ（春から栽培する野菜） 03. 春に咲く花さがし 04. 春の草花を利用した活動 05. 種まきと植えつけ（夏から栽培する野菜） 06. 夏に咲く花さがし 07. 夏の草花を利用した活動 08. 野菜の収穫 09. 野菜の加工と保存 10. 野菜の調理 11. 植物の花とタネ 12. 植物の葉、茎、根 13・14. 野外観察（学外集中実習） 15. まとめ</p>	<p>Pcのシラバス（担当者：徳横）</p> <p>授業概要 子どもたちにとって、「自然」は身近な環境でありかつ未知の存在である。子どもたちと自然との触れ合いが減少したといわれる昨今、子どもたちから周囲の環境への好奇心や探究心を引き出すためには、保育者や教員自身が自然を観察し、触れ、考えるなど、実際に自然を体験することが重要である。 保育における「環境」とは非常に幅広い意味を持つが、ここでは主に身近な自然環境に焦点を絞り授業を行う。授業では、畑の作業方法、春から夏にかけて成長・収穫できる多様な植物の栽培や活用、身近な動物の観察や飼育、自然や生物の特徴を利用した物作りなど、自然を教材とした労作体験を展開する。保育者や教員が自然と触れ合い、環境について考える活動を通して、ものの性質や命の尊さを感じることが出来る教材の開発や指導の方法についても考察する。</p> <p>授業計画 1 労作体験における自然・環境との関わり 2 季節と植物（春） 3 植物のからだのつくり 4 植物の栽培（春）1 5 植物の栽培（春）2 6 植物の生活環 7 植物の生長観察 8 植物の分類 9 植物標本の作製（春） 10 植物の収穫（夏）1 11 植物の収穫（夏）2 12 植物の活用1 13 植物の活用2 14 身近な動物の特徴（夏）1 15 身近な動物の特徴（夏）2</p>
--	--

図1 2018年度の労作体験Ⅰ（前期）のシラバス（一部抽出）

労作体験Ⅰ	労作体験Ⅱ
1 はじめに：身近な自然の観察とジャガイモの植え付け(穂積)	1 生活と植物：秋の種まき（葉膳）（西川）
2 生活と植物：ハーブ類の種まきと株分け（西川）	2 生活と植物：身近な自然の観察と栽培（穂積）
3 植物の栽培（春）1：トウモロコシの栽培（穂積）	3 植物の栽培（秋）1：挿し木（トロピカルハーブ）（西川）
4 植物の栽培（春）2：ハーブの移植（西川）	4 植物の栽培（秋）2：カブの栽培（穂積）
5 植物の栽培（春）3：サトイモ・ラッカセイの栽培(穂積)	5 植物の栽培（秋）3：移植、鉢上げ（江戸時代のハーブ1）（西川）
6 植物の栽培（春）4：ミントの挿し木と観察（西川）	6 植物の栽培（秋）4：サトイモの収穫（穂積）
7 植物の栽培（春）5：畑の整備（穂積）	7 秋の栽培：収穫と花束作り（江戸時代のハーブ2）（西川）
8 植物の栽培（春）6：ハーブの鉢上げ（西川）	8 秋の栽培：アブラナ科植物（穂積）
9 自然の観察：動物の行動（穂積）	9 植物の栽培（冬）1：収穫（カレーのスパイス）（西川）
10 植物の栽培（夏）1：ハーブガーデンをつくる（西川）	10 植物の観察1：樹木検索とドングリ（穂積）
11 植物の収穫（夏）2：ジャガイモの収穫（穂積）	11 植物の栽培（冬）2：霜よけ・冬の準備（西川）
12 植物の収穫（夏）3：プランターと畑に植える（西川）	12 植物の活用：紙作り（穂積）
13 植物の収穫（夏）4：トウモロコシの収穫（穂積）	13 植物の活用：種の選別、ハーブティー（西川）
14 植物の収穫（夏）5：収穫方法、花束作り（西川）	14 植物の観察2：樹木検索と実果（穂積）
15 まとめ（穂積）	15 まとめ：種の選別（西川）

図2 2024年度の労作体験Ⅰ（前期）と労作体験Ⅱ（後期）の授業計画

3.2 現在（2024年度）の労作体験の実践

図2は2024年度労作体験Ⅰ・Ⅱの授業計画を示す。担当者2名のオムニバス形式に変更したことにともない、学生は圃場での栽培もしくはハーブ栽培と活用に関する体験を隔週で交互に行っている。前期・後期を通しての授業概要を次に示す：「子どもたちにとって自然は身近な環境であり、かつ未知の存在です。子どもたちは自然との触れ合いを通して自然への好奇心を高め、探究心を持って試行錯誤しながら生きた知識や経験を身につけます。一方、人と自然との関わりが減少したといわれる昨今、子どもたちの好奇心や探究心を引き出すためには、教員自身が自然を観察し、触れ、考えるなど、実際に自然を体験することが重要です。自然とは非常に幅広い意味を持ちますが、ここでは身近な植物とその環境、および生活との関わりに焦点をあてて授業を行います。授業では、実務経験を活かして春から冬にかけての作物やハーブの栽培や収穫、身近な動物の観察、自然の特徴を利用した物作りなど、自然を教材とした労作体験を展開することを予定しています。環境について考え、ものの性質や命の尊さを感じることができる教材の開発や指導の方法についても考察します。（2024年度シラバスを一部改変）」

ここで、「自然を教材とした労作体験」とは、主に植物の一生を実習体験することを示す。授業概要に示すように、第Ⅳ期においてもこれまでの授業方針を継承し、植物と直接関わる活動、また自然と関わり自身の生活を豊かにする活動、すなわち豊かな人間性を育む学びを目指している。また授業は引き続き教職課程の生活科に位置づけられており、小学校や幼稚園・保育所等における栽培環境の違いを念頭に、植物栽培を通した自然理解、および人間生活との関わりを実感できる体験を計画している。また栽培はこれまで同様、一貫して害虫や除草のために農薬を使用することなく有機無農薬栽培を継続している。これは食育的な観点だけではなく、作物やその周辺に昆虫を含めた多くの生物が見られる環境(生態系)を構築するための、いわば教材作りの過程でもある。

各担当者の活動概要を次に示す。

(1) 圃場の活動

身近な野菜を中心に園芸活動を行い、栽培に関する基礎的な知識・技能、および植物の

進化生態学的な知見を修得する。主な栽培品目を表2に示す。

授業では畝立て、植え付け、施肥、除草、土寄せ、収穫の一連の作業を、植物の成長と周囲環境の変化に合わせて適宜行う(図3)。栽培では植物の共通性・多様性が感じられるよう同科の植物の複数種の栽培(例えばウリ科のキュウリ、カボチャ、ゴーヤなど)。



図3 圃場の活動：左 畝立ての様子、中央 ジャガイモを植えた様子、右 圃場の景観

表2 2024年度の栽培品目

圃場の活動	ハーブ栽培と利用
アオイ科 (Malvaceae)	アオイ科 (Malvaceae)
オクラ	マロウ
アブラナ科 (Brassicaceae)	ローゼル
カブ*	ワタ
カリフラワー*	アヤメ科 (Iridaceae)
キャベツ*	サフラン
ダイコン*	イネ科 (Poaceae)
ブロッコリー*	ハトムギ
イネ科 (Poaceae)	レモングラス
トウモロコシ	シソ科 (Lamiaceae)
ウリ科 (Cucurbitaceae)	セージ
カボチャ	ミント ペパーミント
キュウリ	ストロベリーミント
ゴーヤ	バジル スイートバジル
ズッキーニ*	タイバジル
サトイモ科 (Araceae)	ルビンバジル
サトイモ	レモンバジル
ナス科 (Solanaceae)	ラベンダー
ジャガイモ*	ラムズイヤー
トマト	ショウガ科 (Zingiberaceae)
ナス	ウコン
ピーマン	セリ科 (Apiaceae)
ヒガンバナ科 (Amaryllidaceae)	クミン
タマネギ*	フェンネル
マメ科 (Fabaceae)	タデ科 (Polygonaceae)
エダマメ	ルバーブ
キヌサヤエンドウ	ノウゼンハレン科 (Tropaeolaceae)
スナップエンドウ	ナスタチウム
ソラマメ	マメ科 (Fabaceae)
ラッカセイ	エビスグサ
	バタフライピー

* 多数の品種を栽培した作物は種名のみ記載している。

あるいは同種における特徴の異なる複数品種の栽培（例えばジャガイモの「インカのめざめ」、「アンデスレッド」、「キタアカリ」など）を実践し、観察・収穫のための教材としている。また種子（有性生殖）と塊茎（栄養生殖）を同時期に栽培する際には、植え付けの方法や体のつくり、生殖方法が比較できるようにしている。また多品種の栽培により、収穫時に各品種の収穫物における形質の違いが視覚的に理解できるとともに、早生と中生の作物の収穫までの期間の違いも実感できるよう計画している。また生物教材を扱う際の考え方や圃場での作業を省力化するための工夫、生活科や領域「環境」における自然と関わりについて、植物の進化・生態の観点から考察している。

(2) ハーブ栽培と利用

ハーブをテーマに、植物の特徴や栽培理論に関する基礎的な知識・技能を修得することを目的とする。主な栽培品目を表2に示す。

種からの栽培だけでなく前年度から継続栽培している株の活用や、移植、挿し木、鉢上げなどを行うことで育てる喜びと利用する楽しさを経験し、植物教材の育成だけでなく学校や園内の環境整備にもつながる内容となっている。また播種から鉢上げまでの活動は、収穫して活用する材料の準備としても位置づけられており、栽培したハーブはその後の授業でハーブガーデンの創生やプランターへの移植・アレンジメントやお茶作りなど総合的に活用し実践を行う（図4）。収穫時の体験では、美しい花のつくりを鑑賞するだけで



図4 ハーブガーデン創成の様子：左 作業風景、右 完成したガーデン



図5 収穫後の植物活用の一例：左 ドライフラワー作り、右 製作したタッジーマッジー

なく香りを楽しんだり、ドライフラワーにして複数を合わせてミニブーケ‘タッジーマッジー’を作成し歴史的由来も学ぶ(図5)。生葉をブレンドしてお茶として試飲する、ワタを処理して糸紡ぎをするなど、様々な形で五感を刺激する活動を取り入れつつ、自然と人間生活との関わりが実感できる内容になっている。約20品目にも上るハーブの栽培は、授業が進行するにつれて芳しい香りが立ち、視覚的・嗅覚的にも学生たちの達成感を高める。また「ハーブのラベル作り」が学生に好評で、時間をかけてイラストを描き基本情報を観察する楽しさは出来上がった作品からも伺うことができ、ガーデンをより華やかに彩る効果がある。

3.3 2024年度実践の特徴

現在の実践と2018年度シラバスの共通点は、多様な植物の栽培、観察、活用を行っていることである。一方、両者の大きな違いは、現在は授業がオムニバス形式となり、交互に異なる活動を隔週で行っていること、また具体的な栽培植物名を多数、授業計画に示していることである。授業概要に示したとおり、植物栽培を通して自然に親しみ理解を深めることは生活科および領域「環境」共通の目的であり、そのため多様な品目の植物や品種、栽培環境を融合する形で実践を進めている。圃場における作物栽培およびハーブ等を使ったガーデンの創出・収穫物の活用は、小学校や幼稚園、保育所等における栽培環境の違いを想定しつつ、生物多様性を実感できる体験が求められる現状によく合致している活動であると考えられる。また栽培品目の提示は、どの時期に何を育てるかを大まかに示すことで、学生の授業全体の見通しと振り返りにつながることを意図している。

オムニバス形式の授業の利点として、2週おきとなる植物観察がある。春から初夏までの間、特に芽生えの時期は1週間では植物の成長は実感できないが、2週間という期間は植物の成長を観察者が実感するには十分な時間である。学生たちはそれぞれの担当の授業に出る度に植物成長の驚きや生命への畏敬の念を持って植物を観察することができたと考える。一方、欠点としては、雨天により屋外で作業ができない場合、次の授業回(準備してから一月後)では見せたい植物の様子を見せられなくなったり、植物の生長に合わせた園芸作業を体験できなくなることである。これらについては、他専攻が1週ずらして栽培している植物を観察したり、植物や作業の映像・動画を用いるなどしてできる限り補完している。

現在の実践とこれまでの労作体験の大きな違いは、栽培したり加工したものを食べる経験の有無である。例えば2018年シラバスでは、食育に関する直接的な活動として、収穫した作物を加工したり、食したりする機会を多く設けていた(図1)。Peシラバスでは08. 野菜の収穫、09. 野菜の加工と保存、10. 野菜の調理が、Pcシラバスでは10. 植物の収穫(夏)1、11. 植物の収穫(夏)2、12. 植物の活用1、13. 植物の活用2が、それぞれ該当する。またそれ以前もソバ打ちや豆腐作り、パン作りなどの活動を集中講義の形で実践している。当時の学生たちは、無農薬で栽培された食物を収穫し、その様子を観察して、茹でる、皮をむく、あるいは焼くといった調理をして食するという、一連の過程を通して食の楽しさや重要性を感じる機会となっていたのであろう。

オムニバス形式にしたことによる授業内容の変更は、多様な栽培技術や自然科学的な基

礎知識の修得に関する活動を増やしたが、食育に関する直接体験を減らしているといえる。その前提となるのがコロナ禍における感染対策である。2020年度からは感染予防として収穫後に調理することはせず、自宅で調理をして見た目や味の違いを確認するように変更した。その後、授業をオムニバスで実践するにあたり、各担当者が植物の生長に適切な園芸活動を検討したが、2週間おきの7～8回では基礎知識や解説のための活動時間は十分でないと考え、調理・実食の時間を減らした現在の授業計画になった。そういった意味では、授業内容と学科カリキュラムの包括的な観点から区別するならば、幼児保育専攻に労作体験を設置した時期までを第Ⅳ期とし、現在のオムニバス形式以降の取り組みを第Ⅴ期とするのが適切かもしれない。

最後に、2024年度の植物栽培の評価について述べる。穂積（2024）によれば、いくつかの園芸活動時に調査した労作体験の授業評価アンケートにおいて、労作体験の要素である「活動」「好意」の各項目の傾向は、先行研究（岩崎ら、2006）のそれと非常によく似ていた。一方で「大変さ」の項目はやや低く、学生たちは作業を比較的大変ではないと感じている。これは、以前の労作体験で行っていた林業等の重労働や学外体験における難しい作業が減ったことによるものと考ええる。また「洗練さ」の各項目も先行研究のそれと傾向はよく似ていたが、穂積の調査（2024）では洗練さの項目の1つである「現代的な」が顕著に高かった。これは、近年、普及している農法の解説・適用や希少なものを含めて多様な作物等の栽培・活用等の実践が要因ではないかと考える。これらアンケートの結果を直接比較することはできないが、活動、好意、大変さの傾向はおおむね似ていることから、現在の実践も学生たちにとって興味深く、かつ生活・協働に関わる活動を提供していると考ええる。また、体験の内容により学生たちの評価が項目ごとに変わりうることから、今後も活動内容が変わる度に評価を行い、体験活動の質を維持・向上していきたい。

4. 今後の展望

労作実習など以前の授業では、園芸活動だけではなく植樹や大鎌を用いた下草刈りなど林業的な活動も行われていたが、その後、栽培活動や収穫物の活用が増加するなど、学修環境や社会のニーズに合わせて授業計画の変更が進められてきた。岩崎によれば、労作体験の栽培の指針は、経済活動をともなう農業ではなく園芸であり、かつ自然を教材とすることを目指した実践である（穂積、私信）。労作体験はこれまでの全期間を通して、生活科や領域「環境」に基づき、栽培に関する基礎的な知識・技能、自然に親しみ理解しようとする態度、生物に関する自然科学的な視点の修得を主な目標として実践してきた。その際、いくつかの先行研究（岩崎ら、2004、2006；立木ら、2006；穂積、岩崎、2017）が示すように、どの期間の学生たちも、種々の園芸活動を通して達成感や作業の楽しさ、食への関心、生物の成長や多様性の理解、自然や周囲の人びとへの感謝の気持ちを育んできた。学生たちは、ときに協力して栽培環境を開墾・整備したり、自分たちが植えた植物の生長を観察したり、収穫物を加工したり食する経験を通して生活への興味・関心を高め、ときに植物や周囲の自然にやすらぎを感じているなど（穂積、2024）、植物栽培を中心とした体験を通して学修している。

現在の労作における課題として、調理の位置づけが挙げられる。授業における食に関す

る活動・解説の際、学生のリアクションペーパー等から「食に関する感謝の念と理解」、「子どもの食育における保護者、教育関係者等の役割」、「食品の安全性の確保等における食育の役割」について考えながら取り組んでいると感じている。一方で、授業で調理・試食をしたいという要望も聞こえるが、調理をしなくなった後の特徴として、持ち帰った野菜等を通じて家族や地域の方々とのコミュニケーションが増えたという感想も増えてきた。今後は、食育の「食に関する体験活動と食育推進活動の実践」を念頭にいた内容を再検討し、どのような形で生活との関わりや食育を深められる園芸体験を実践できるか考えていきたい。もう一つの課題は教材となる植物の管理である。各授業回の教材となる植物の管理は2週おきの学生の活動だけでは到底足りず、現在の担当者2名（専任・兼任各1名）だけでは圃場等の維持は非常に困難である。実際に現在、2名の実習補助者が栽培植物およびその周辺を管理することで授業が成立している一面がある。労作体験における多彩な体験の実践は、実習補助者に加え多くの学園関係者、学生・保護者の皆さまの援助により成立していることを、この場を借りて感謝申し上げたい。

人の自然離れが叫ばれる昨今、園芸活動を通して実際に自然に親しみつつ教職教育を行い、かつ様々な経験を通して人間性を育む労作体験の意義は大きい。今後もこれまでの活動を継続しつつ、時代に合わせた発展を進めていく所存である。

謝辞

故・岩崎哲郎教授には植物栽培の方法や体験活動の実践について懇切丁寧にご指導いただいた。中井修氏、岩間真一氏は2024年度の授業準備・実践を行うにあたり、植物の維持・管理にご尽力いただいた。労作体験の授業実践にご協力いただいた学園教職員の皆さま、労作体験に熱意を持って取り組んだ児童教育学科卒業生・在学生の皆さまに感謝の意を表する。

引用文献

- 岩崎哲郎，立木徹，伏見陽児．(2006)．「労作実習」に対する児童教育学科卒業生の情緒的イメージ．茨城キリスト教大学紀要．II，社会・自然科学，40，155-161．
- 立木徹，岩崎哲郎，伏見陽児．(2006)．「労作実習」に対する児童教育学科卒業生の意識．茨城キリスト教大学紀要．II，社会・自然科学，40，163-183．
- 穂積訓．(2017)．労作体験の実践と幼児保育専攻の学生が自然・環境に抱く意識．茨城キリスト教大学紀要II，社会・自然科学，51，177-188．
- 穂積訓，岩崎哲郎．(2017)．「労作体験」の実践とその成果ー学生の自然に対する意識についてー．日本教授学習心理学会 第13回年会予稿集，26-27．
- 穂積訓．(2024)．情緒の変化を指標とした園芸体験と活動の評価．日本教授学習心理学会 第20回年会予稿集，30-31．

Transitions in Work Education within the Department of Elementary Education at Ibaraki Christian University

Satoshi Hozumi

(Department of Elementary Education, Faculty of Literature, Ibaraki Christian University)

Ayako Nishikawa

(Chief of Mito Botanical Park)

Summary

The course Work Education is a core subject in the Department of Elementary Education at Ibaraki Christian University, established approximately 40 years ago. In this course, students engage in plant cultivation to gain an ecological viewpoint on nature and acquire basic knowledge and skills related to science and life studies in the teacher training course. In addition, the course aids in developing their sense of humanity. While the basic objectives of the course have not changed since it was first developed, the content of the activities and their position as a teaching subject have changed along with changes in the curriculum of the department and in society. In this study, the history of work education is divided into four periods, with the characteristics of each period being outlined, along with the transition in the curriculum of the department. Finally, current practices of work education are presented, and a comparison is drawn between the similarities and differences across other periods to consider the future prospects of work education.